

経済学の基本テキストはコレだ!



スティグリッツ/ウォルシュ
『入門経済学』第3版

■新報社(2005年)
■価格3,675円(税込)

中野正裕

いわずと知れた「市場と経済」のテキストです。Key Questionsにより各章の学習目標が明確化され、重要概念、語句は具体例を用いてきわめて丁寧に解説されています。はじめの数章で「経済学的な考え方」の基本となるトレードオフやインセンティブといった基礎概念や市場分析の基礎がきちんと把握できると思います。また、理論学習の目的や方向性を明確化し、さらなる興味を促すような工夫がなされています。基礎理論の学習だけでなく、経済的思考、論理的思考を学ぶ意味でも参考となる本です。

岡田知之

(多くのアメリカにおける初心者向けテキストと同様に、)このテキストも豊富な具体例を挙げ、その例をつづけて少しずつ経済学に関する理解を深めることができるように工夫されている。「これ以上の丁寧な説明方法は存在しない!」といえるくらい丁寧な説明が行われている為、きちんと努力すれば、他の本を参考にすることなくこのテキストを理解することはできるであろう。本格的に経済学を学ぶ準備の為のテキストとしては、すぐれたテキストである。

伊藤宣広

世界的に有名な経済学者の手による入門用テキストです。本学でも1年生向け科目「市場と経済」の共通テキストに採用しています。経済学に関する予備知識が一切ない読者でも読み進められるよう、基本用語の解説から始まり、段階を踏んで基礎から学んでいくことができます。豊富な具体例やコラムが随所に盛り込まれているので、経済学は抽象的で難しそうだという先入観を抱いている人も、是非手にとって欲しいと思います。



伊藤 元重
『入門経済学』第3版

■日本評論社(2009年)
■価格3,150円(税込)

中野正裕

ミクロ経済学、マクロ経済学の2パートがバランスよく配置されています。各パートは基礎部分から応用(展開)部分まで、段階的に理解できるよう工夫されています。全般的に、数学的記述は最小限度にとどめられ、重要な基本概念が平易に解説されています。ただし、本文は500ページ余りとややボリュームがあるので、たとえば基礎部分を1年次にじっくり読み、応用部分は基礎部分の理解がひととおり進んだのち、本格的な理論学習をするさいの手引書として活用されることを勧めます。

岡田知之

アメリカのテキストに近いスタイルの本である。経済理論を用いて現実の経済現象を考察する方法を習得できるように、(スティグリッツのテキストほど豊富ではないが、)多くの例が挙げられている。経済問題の具体例と経済理論の解説のバランスが絶妙で、とても読みやすい構成となっている。数式の利用が多少あるものの、工夫された図を用いるなど、説明が抽象的になることを意図的に避けているようである。多くの人の手にとって、わかりやすいテキストとなっている。

伊藤宣広

日本人の執筆した入門用テキストの中では定評ある1冊です。前半でミクロ経済学、後半でマクロ経済学を扱っており、1冊で両方の基礎を学ぶことができます。両者は内容的に独立しているため、関心に応じてどちらから読んでも良いでしょう。章末に演習問題のついているテキストは多いのですが、解答・解説は別売りとなっている本が多い中、この本はちゃんと巻末に解答例を掲載してくれてあるので良心的です。



福岡 正夫
『ゼミナール経済学入門』第4版

■日本経済新聞社(2008年)
■価格3,675(税込)

中野正裕

ミクロ、マクロ経済理論の基礎だけでなく、経済体制、国際貿易や経済発展にも言及しており、テキストというよりは対象領域を幅広くカバーした専門学習の手引書といえます。ミクロ・マクロ部分では、より専門的ないくつかのトピックスにも言及しています。ただし、初級書ではあまり扱われない専門用語についても、初学者にも分かるよう丁寧な解説が付けられており、中・上級書へと抵抗なく進めるような配慮がなされています。

岡田知之

経済理論の説明を重視した本格的な入門書である。内容がとても豊富であり、通常の「入門書」では取り扱わない項目の説明も、このテキストでは行われている。グラフや数式を多く用いてわかりやすく説明されているが、入門レベルでは少し難しい項目も含まれている為、他の本を参考にすることなく、このテキストを完全に理解することは難しいかもしれない。ただ、基本的な項目の説明はわかりやすく、他の本に載っていないことも説明しているの、手元にあると便利なテキストである。

伊藤宣広

「経済学の世界」「ミクロ経済学」「マクロ経済学」の三部構成です。ととところどころで数学が使われており、初学者には若干難しいところもありますが、丁寧に解説されているので、腰を据えてじっくり取り組みれば十分理解可能です。0次同次性、均衡点の存在証明、アローの不可能性定理といった他の入門用テキストではあまり扱われないトピックスもとりあげており、3・4年になっても活用できる本です。



岩田 規久男
『経済学を学ぶ』(ちくま新書)

■筑摩書房(1994年)
■価格756円(税込)

中野正裕

ハードカバーのテキストのように、講義と併行してじっくり読み進めるのではなく、短期間に経済学の概要をコンパクトにつかむのに適した本です。ただし、扱われているトピックスには、簡単に流し読みできない部分(例えば価格弾力性についての数値計算など)が含まれていますし、理論分析が有用であることも理解できると思います。最終章では、経済学を学ぶうえで有益な参考文献のリストや経済学の体系図が親切にまとめられています。

岡田知之

ページ数が少なく、加えて身近な経済問題を説明している為、初学者でも抵抗なく読めそうなテキストである。(数式などは用いられていないものの、)経済理論と現実の経済問題の関係を十分に意識した内容となっており、一通り経済理論を学習した後、経済理論を用いて現実の経済をどのように分析すればよいかを理解する上でも参考になるテキストである。経済学の習熟度に応じて、さまざまな読み方が出来るような内容となっている。

伊藤宣広

コンパクトな新書サイズの入門書です。この本を使って経済学を一から体系的に学ぼうという用途には向きませんが、読み物として、経済学の基本的な考え方を知るには有用です。身近な話題を経済学的な考え方を使ってうまく説明しています。第8章の「経済学の学び方」は、新入生の皆さんにとって、これからの経済学の学習の指針を与えてくれるでしょう。

【総評】

中野正裕

毎回、書店に足を運ぶ度に、新しい経済学の入門テキストが続々刊行されるのを目にします。新しいトピックスを盛り込んだ斬新な教科書にも魅力を感じますが、この特集では、比較的スタンダードな教科書として長く定評のある数冊を選定しています。たった1冊のテキストに頼ることが全ての学生諸君にとって賢明だとは思いません。数多くの出会いの中から、自分にfitしたテキストを見つけてほしいと思います。重要なことは、(i)幅広く様々なテキストを見渡し、自分の読みやすいと感じるものを選ぶこと、(ii)テキストにおける個々の章や節の目的、著者の意図を理解するよう心がけること、そして(iii)難解な箇所当たったら、他のテキストや文献でどう説明されているか調べてみる、です。(iii)については、教員だけでなく友人や先輩の助言が有益なこともあります。文献学習を通じて学ぶ楽しみを増やしてもらいたいと思います。

岡田知之

人と人の間に相性があるのと同じように、人と本(文章)の間にも相性があるように思う。ある文章が自分にとって自然に感じられるものであっても、同じ文章を他の人が不自然なものと感じるケースがあるということは否定できない。また、説明方法の好みも人によって異なる場合がある。厳密で客観的な説明を好む人もいれば、(多少厳密さを犠牲にしても)直感的な説明を好む人もいる。人の好みは多様である為、すべてに人にとって(ベターなテキストは存在するかもしれないが、)ベストなテキストは存在しないのではないかとと思う。一昔前とくらべ、近年では個性的な入門書の出版が増えているように思う。これは、自分にあったテキストを選びやすい環境が整いつつあることを示しているのではないだろうか。どのようなテキストを用いたとしても、学習を進める際には努力が必要となる。しかし、自分にあったテキストを見つければ、よりスムーズに学習を進めることができるであろう。自分の目で、自分にあったテキストを見つけ出ししてほしい。

伊藤宣広

経済学に「教科書」というものが登場したのは第二次世界大戦後のことです。せいぜい60年ほどの歴史しかありませんが、これまでいろいろな時代・国の様々な経済学者が考えてきたことのエッセンスをパッチワークのように継ぎ接ぎして、最大公約数に近い形でまとめたのが教科書です。これには賛否両論ありますが、現在の経済学のオーソドックスな考え方が手際よく解説されており、知識として一通り習得しておくことは決して無駄にはならないでしょう。その上で、自分の関心のある方向に進めば良いのです。入門書とはいえ、その内容は長い年月をかけて蓄積されてきた成果が凝縮されているものですから、一筋縄ではいきません。ミクロ経済学にしてもマクロ経済学にしても、講義を1回聴いただけでマスターできるほど易しくはありません。講義と並行して、自分でも教科書を読み進めていくことが不可欠となります。今では非常にたくさんの教科書がでていきますので、実際に手にとって、自分に合うものを選んでみてください。



左／中野正裕准教授
中央／岡田知之准教授
右／伊藤宣広講師